

平成19年 1月10日

ヘルパーステーションだいとう ケアレポート No.9

ヘルパーステーションだいとうのケアレポートNo.9をお届けします。

年明け最初のレポートになります。

昨年最後のヘルパー全体のミーティングで事例検討会を催し、90分で4例の事例発表を行いました。準備の段階での「小さな事例でも、確実にポイントをとらえるように」との指示の下、発表者が調整して訪問介護の抱える課題を様々網羅して検討しました。

1. 自立支援 2. 他職種・他事業所との連携 3. 認知症ケア 4. ターミナルケア
です。以下に内容(抜粋)をお示しします。

事例1

70歳 要介護5 援助期間3ヶ月 独居(介護保険対象外のケア付き施設入居)

脳梗塞による入院生活が長く寝たきり状態であったが、退院後住まいを移し、通所サービス、福祉用具貸与、訪問介護などを利用しながらの生活の事例。

訪問介護としては、食事介助、排泄介助、着替え、通所サービスの送り出し等。コミュニケーションを増やし、新しい生活に慣れていただき生活を活発にしてほしいとの依頼。

身体的・精神的な負担とのバランスを取りながら、食事介助や細かな生活上の動作を、声かけや支援を交えて本人のできることを増やしていった。リハビリなど他のサービスとの相乗効果も相まって、少しずつ自立の意欲が見えてきた。最近では生活者としての自覚や心理状態もみられるようになり、生活全般に意欲的に取り組む場面が増えてきた。

* 自立支援に向けてのサービス提供の目標・方法・手順と評価を常に意識する。

* 利用者の身体的・心理的・精神的な状態を寄り添いながら理解する。

事例2

63歳 自立支援法による訪問介護利用 援助期間19ヶ月 3人暮らし

当事業所を利用されていたが、途中より他訪問介護事業所の参入があった。他事業者や医療機関との連携が遅れがちになり、連携不足を家人より指摘された事例。

サービス提供責任者が事業所内(利用者・ヘルパー)の調整に目が向きすぎて内向きになり、他事業所との連携がおろそかになった。自立支援法にはケアマネジャーの制度がなく、ケアプランや関連文書もない。利用者本人・家族が調整の中心になるが、介護保険のケアマネジャー制度に慣れたサービス提供責任者が、関係者間の調整をケアマネジャーに依存する姿勢を修正できず、調整が遅れた。

* 現場中心主義に偏りすぎず、全体をコーディネートする視点をおろそかにしない。

* 利用者本人・家族による調整には主観的になりすぎる例があるので留意する。

事例3

77歳 要介護4(歩行障害あるも認知症が中心) 援助期間4ヶ月 独居

認知症によると思われる、(ダンス等に)食べ物を隠す(仕舞う)、ポータブルトイレの排泄物を風呂場や台所に流す等の行為がある。本人の思い通りにならない時は攻撃的になり、以前は暴言・暴力もみられた。

本人の行動を否定せず、食べ物を隠す（仕舞う）際、ヘルパーがラップで包むなど手伝う。いわゆる問題行動に対して否定的な態度を取らず、共感的に受け入れることで徐々にヘルパーを受け入れる信頼関係が築かれていく。信頼関係構築後に課題分析による解決を図る。

- * 認知症と共感的に関わるとは、症状にとらわれることなく、その人の尊厳や人権を尊重することにより実現する。
- * 認知症の方との言語コミュニケーションのみでは、その人となりやその人自身を理解するには不十分で、丁寧な関わりにより得られた情報の積み重ねが必要である。

事例4

68歳女性 要介護2（がんによるADLの低下） 援助期間1ヶ月 夫婦二人暮らし
がん性疼痛や倦怠感により伏せっていることが多い。調理など主婦としての役割ができていない、病気の進行に不安を持っている。夫もどのように対応して良いか判らず、妻に上手く寄り添えていないと推察される。

ヘルパーは観察を怠らず、自然な形の中で常に状況の把握を行い、日常生活の継続に努める。疼痛の状態や投薬の効果などの報告を正確に行い、医療との連携に努める。

- * 健康や日常生活の中で出来なくなること事が増えて、喪失の悲嘆を抱える利用者寄り添う態度としては、たとえ何もできなくても逃げずに利用者をひとりぼっちにさせない態度で接する。
- * 頻回に接するヘルパーは専門的な知識が無くても、日々の生活の中での利用者の、身体的・精神的な変化には気づくことができる。
- * 連携によってその変化を専門家に報告して判断を仰ぐことが、利用者のQOLを高める。

まとめ

1. 事例検討によって深く掘り下げることで、そのケースにおけるケアプランやサービス提供責任者が策定する個別援助計画の支援の目的・目標や方法を携わるもの全てが共有できます。
2. ケースの中でのいくつかのポイント、異なる立場からの様々な視点を確認し評価し、次へのケアに生かすことができます。
3. ケアマネジャーやサービス提供責任者の計画上の支援の意図を理解することで、ヘルパーの活動の根拠が明らかになり、ヘルパー自身も自己評価しながら支援することでチームケアが促進されます。
4. 事例検討に加わることで、自分が経験しないスキルを間接的ですが理解することができます。また、事例提供者にフィードバックすることができます。
5. 繁忙な業務に取り組む日々で、流れがちなケースの振り返りを深めることで、支援のあり方を丁寧に評価できます。

◎事後のアンケートによれば、参加した皆がそれぞれに手応えを感じた様子で、これからも担当チームによる個別のケース検討に加えて、事例検討会を定期的に開催致します。